

青山愛香 著

## デューラーの遍歴時代―初期素描の研究

## 序章

「旅」はデューラーの芸術を考える上で極めて重要な意味を持っている。第一次イタリア旅行(一四九四〜九五五年)では、アルプスを越える行き帰りの道中で風景水彩素描を描き、西洋絵画史において「風景画」という新しいジャンルの先駆けとなる傑出した作品を多数残した。二度目のイタリア旅行では、既に木版画連作《黙示録》(一四九八年)を初めとする作品によって国内外に名を馳せていたデューラーがヴェネツィアで《ローゼンクランツフェスト》《ブラハ、国立美術館》を描き、ヴェネツィア人たちに負けない腕前を披露するなど、イタリア人たちに自分の技量を十分に認知させる旅となった。そして晩年のネーデルラント旅行では、成功した北方の画家として王者のごとく当地で歓待され、新たな刺激を受けたデューラーは一五二一年に《聖ヒエロニムス》(A.162)(リスボン、国立美術館)を描き、油彩画で再び新境地を開いている。このように二度のイタリア旅行ならびに晩年のネーデルラント旅行の意義はよく知られているが、果たしてデューラー最初の遍歴の旅とはどのようなものだったのか、という疑問から本書は出発している。

第一次イタリア旅行に赴く直前の遍歴の四年間については多くの資料は残されておらず、その滞在先や作品については未だに謎が多い。だがデューラーの画業の出発点はまさにこの時代にあり、ここでデューラーの様式的な基盤が築かれた。本書は以下、遍歴時代に制作された作品に焦点を当てながら、この四年間がデューラー芸術確立の上で極めて重要な修行期間であったことを明らかにしてゆく。

百年以上の歳月をかけて徐々に輪郭づけられていったデューラーの遍歴時代であるが、現在でも二つの重要な問題が未解決のままに残されていると言えるだろう。一つはデューラーが遍歴の前半にネーデルラントに赴いたか否かという点、二つ目はバーゼル時代の挿絵群、中でも《テレンティウス喜劇素描》はデューラーの真作かという問題である。これらの課題を踏まえた上で更に本書が解明すべき点は、デューラーの遍歴時代の作品群をデューラーの画業の中にどのように発展的に位置づけるかということである。従来の研究史において、デューラーの遍歴時代というのはデューラー・モノグラフィイの出だしのエピソードに過ぎず、この時代に制作された作品はデューラーの第一次イタリア旅行以後の作品からは切り離されて扱われてきた。仮にバーゼルの《テレンティウス喜劇素描》がデューラーによって一四九二年から九四年の間に制作されたとする、デューラーの木版画の最高傑作である《黙示録》は一四九六年に開始されており、両作品の間には数年の開きしかない。果たしてデューラーの遍歴時代の木版画作品は、傑作木版画連作に発展的につながらないのであろうか。

本書はこれまでの研究動向を踏まえながら、次の三点の課題に取り組みたい。第一にデューラーの遍歴時代におけるネーデルラント滞在の可能性を再度ヘルトヘント・トート・シント・ヤンスとの関係から探ること。第二にバーゼル時代の素描《テレンティウス喜劇》の作品研究を通じて、同作品におけるデューラー的要素を明らかにすること。そして最終的にこれまでデューラーの生涯の出だしのエピソードの扱いに甘んじてきた遍歴時代をデューラーの画業の出発点として位置づけることである。



デューラー 《聖家族》

■A5判 本文358頁 口絵8頁 挿図289点  
 ■定価27,300円(本体26,000円+税)  
 ISBN978-4-8055-0616-5 C3070

中央公論美術出版

http://www.chukobi.co.jp

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱いは

口絵  
序章

デューラーの遍歴時代／遍歴時代の作品群／デューラーとネーデルラント美術

## 第一章 遍歴時代の作品と手本

ヘールトヘン・トート・シント・ヤンスとデューラー

ヘールトヘンの《聖ヨハネの遺骨の焼却》とデューラーの木版画《二万人の殉教》

ヘールトヘンの《哀悼》とデューラーの《哀悼》

ヘールトヘンの《荒野の聖ヨハネ》とデューラーの素描《聖家族》

デューラーの木版画《阿呆船》《サムソン》ならびに銅版画《岐路に立つヘラクレス》

デューラーの《聖エウスタキウス》

## 《玉座の老人と跪く青年》の素描

## 第二章 デューラーにおけるネーデルラント的要素

一四九二年の《ライオンの棘を抜く僧坊の聖ヒエロニムス》におけるネーデルラント的な室内空間

ネーデルラント的な画面秩序

(1)二本の木が果たす役割／(2)画面の下枠の領域

一五〇〇年の《グリムの哀悼》におけるイタリアとネーデルラント的要素の融合

## 第三章 バーゼルの《テレンティウス喜劇素描》の画像

作品の問題点

バーゼルの《テレンティウス喜劇挿絵》

《ウルムのテレンティウス》(一四八六年)

《ウルムの宦官》と《バーゼルの宦官》

手本としてのテレンティウス写本

テレンティウス写本の挿絵の原理

テレンティウス写本とバーゼルの素描

手本としての〇写本

## 第四章 バーゼルの《テレンティウス喜劇素描》の様式

背景の構造

(1)見上げの構図／(2)見下ろしの構図

背景の構造の起源

(1)ドイツの挿絵／(2)ネーデルラント絵画の風景構造

下枠に接するドレパリー

(1)下枠とドレパリーの接点が生み出す三角形の凹の形態／(2)道具の上のメレンコリア

素描の筆跡問題

(1)投影線／(2)男性人物像の足元に見られる線／(3)建物の陰影線

## 終章

一 手本との関係／二《黙示録》の様式／(1)イタリア美術の影響／(2)《黙示録》とドイツ美術

三《黙示録》の線描の芸術

附録 『テレンティウス喜劇』作品カタログ

『アンドロスの女』『宦官』『自虐者』『兄弟』『義母』『ホルミオ』

あとがき

参考文献一覧／図版出典／図版目録／索引



デューラー 《執筆するテレンティウス》

## 著者略歴

## 青山愛香(あおやま あいか)

1991年 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。

2001年 同大学大学院美術研究科博士課程終了。博士号(美術)取得。

2005年より獨協大学外国語学部ドイツ語学科准教授。

## 主要論文:

「初期デューラーとネーデルラント美術」『美術史』第145冊 1998年 156-173頁。

「遍歴時代のデューラー作品」東京藝術大学学位取得論文 2001年。

「遍歴時代のデューラー作品—初期ネーデルラント絵画の影響をめぐる」Aspects of problems in Western Art History Nr.3 2002年。

「デューラー作『玉座に座る老人と跪く青年』の手本素描」『美術学部論叢』2005年 9-21頁。

Ein bisher unbekanntes Vorbild für Durers "Thronender Greis und kniender Jungling"  
In: Anzeiger des Germanischen Nationalmuseums. Nürnberg 2005. S. 7-24.

## 訳書:

ハインリヒ・ヴェルフリン著『アルブレヒト・デューラーの芸術』

(共訳、中央公論美術出版、2008年)。